寺報　真宗大谷派松寺永福寺

松寺だより

平成14年10月1日発行
第26号
発行所
富山市梅沢町3丁目1―6
真宗大谷派　松寺永福寺
電　話（076）423―1848
発行人　長　闇　寿

＜画と文＞福光町東町　山村洋子さんの絵手紙から

今日の視点

恨みに報いるに恨みをもってしたならば恨みの消えることはない

暴力に対しては暴力で抵抗するしかない、という意味がずっと自分のなかにありました。例えば山谷の闘争を映画に撮っていた監督が右翼に殺され、その遺志をついで『山谷―やられたらやりかえせ』という映画がつくられましたね。そういう映画の題名どおりに、特にやられっ放しでいる現状に対しては、力をもって闘っていくことが必要ではないか、という考え方からなかなか自由になれなかった。

それがようやくこのごろ、暴力に対して暴力で報いるという発想から少し抜けれたという気がします。それは、歳を取ったから、といえばそれまでかもしれませんけれども。

「やられたらやりかえせ」という考え方に自分を委ねることができなくなったのは、死刑制度のことを考えるようになってからなんですね。

自分は、死刑というのは必要悪なんじゃないか、と小さい時から考えていました。国家は法の下で人を殺すのはおかしいと思いながらも、それじゃ人を殺した人をそのまま放置するのか、やっぱりある程度の制裁は必要悪として認められるのではないか、というふうにずっと思っていたんですね。

感性としては、やはり人を殺したら、それも人殺しではないか、というのはあったんだけれども、仏教を勉強しながらも、なかなかそういうことに向き合えなかったんです。だから死刑制度の問題は、自分が今まで考えてきたことを全部壊してしまうおそれがあるから、あまり問題にしないようにしていたんです。

ところがある時、その死刑制度とまともに向き合わなくてはならないことがありましてね。ずいぶんと前に名古屋で女子大生誘拐殺人事件がありました。その犯人は逮捕され、死刑が言いわたされ一九九五年に執行されました。その死刑囚の義理のお姉さんという人に出会って、その人たちを通して具体的に死刑ということを考えさせられたんです。さらにはその死刑囚の教誨師をしていたキリスト教の牧師さんとも知り合い、あらためて死刑と向き合うことになった時、やはり暴力に対して暴力で報いるならば、暴力の終ることはない、ということに気づかざるをえなかったんですね。

釈尊の言葉にも「恨みに報いるに恨みをもってしたならば、恨みの消えることはない。恨みは捨ててこそ恨みは消える」というのがあるんですが、死刑制度の問題に向き合う中で、やはり暴力に対して暴力で応える限り、暴力の連鎖、殺し合いの連鎖から少しも抜けられないのだということを思いました。また死刑制度に対して、人を殺した人を制度として殺すのは、やはり人殺しであると。人を殺すのがいけないのなら、制度としての死刑もだし、さらには集団殺人としての戦争もだめであるという形で、人を殺すことはすべてだめだということを言っていかないと、本当の意味での不殺生とか、非殺生とかということにならないんじゃないかということを考えるようになりました。

しかし、自爆攻撃をする人の、自分の身をもって相手を殺そうとする心ということを考えていった時にやはり「テロはだめだ」ということだけでは収まりが付かないものがあることは、今でも思っているんですけれどもね。

だからといってテロが許されるとは思いません。しかしあの自爆攻撃も含めて、ああいう弱い人たちが身体をもって発信していく、表現していく、その中身というか、訴える中身を無視して、一方的に「テロはだめだ」というような言い方に疑問を持ちます。

テロを容認するような「やったらやりかえせ」式の考え方はもう自分の中ではとれないというか、取らない。けれども一方で自爆する人の心を見つめていくことの重さは感じるんです。

（同朋大学教授　尾畑文正さん）

この文章は『真宗』八月号に掲載された「他者に共感する力を、いかにして回復するか」というテーマでフォトジャーナリストとしてアジアの子どもたちをカメラを通して見つめてこられた浅井寿樹さんとの対話から、抄録させていただきました。

感謝

永代祠堂志上納者ご芳名

（平成13年10月～平成14年8月）

一、金貳拾万円也　総曲輪　田中　良二
一、金壱拾万円也　山　室　松本　武久
一、金壱拾万円也　所沢市　桜井すえ子
一、金貳拾万円也　大泉東町　松原　敦子
一、金参万円也　金泉寺　中川寿美子
一、金貳拾万円也　四　方　有澤　宏
一、金貳拾万円也　藤の木　稲波　良孝
一、金貳拾万円也　高屋敷　野村　正治
一、金壱拾万円也　西田地方　田中　滋久
一、金壱拾万円也　大泉町　岡野登志子
一、木製椅子二十脚　西　町　山木　良雄
一、金壱拾万円也　今　泉　瀬川　蓮枝
一、金参万円也　下新本町　柏木　昭男
一、金壱百参拾万円也　西田地方　山縣　章子
一、金貳百万円也　呉羽町　稲垣　翠子
一、金五万円也　長江新町　笹川　和久
一、金貳拾万円也　東　京　相川　武憲
一、金壱拾万円也　四方町　近岡　克己

（敬称略　上納順）

ご案内

十一月四日・五日（月・火）

五日　午前十時　午後一時半
四日　午前十時　（午後なし）

報恩講　謹修

法話　（四日）専徳寺住職　森島憲秀師
（五日）当寺住職　他

今年も聖人のご恩を偲び、ご恩の中に育っている私を明らかにさせて頂きましょう。どなた様もお誘い合わせの上、ご参詣下さいますよう、お待ち申し上げます。

平成十四年　十月

短歌

富山市　長沢菊枝

報恩講を修すと掲ぐ親鸞の見返り橋に佇ちたる御影
むかし祖母より教え給いし親鸞の功徳拙きわが歌に詠む
空襲に逃げし鴉の汝も裔や嘴艶つやと敗戦忌来る
終戦にあらず敗戦忌とわが詠める戦の歌の哀しく候
花々の満つる七月妻が忌を愉悦も添えて向えむ　今は
計り得ぬ命の重く運ばるるや暁闇震わせ救急車過ぐ
落ち椿避けて歩めり菩提寺に孤独嘆きいし友の忌を訪う
毀す家の大黒柱にすがりいつ慟哭となる思いでがある

ご紹介

大正十三年生。富山市旭町に住す。昭和三十九年、ご主人が病死され、幼いお子様二人の母として、また嫁として一家を支える。
「越路短歌」の主宰島原義三郎師、「白南風」の藤平芳雄師の指導をうける。現在「白南風」維持同人、富山東支部長。この十月には初めての歌集『銀嶺』が藤原印刷社から出版される。

平成13年お盆特別法話より

城端町大福寺住職　太田浩史師

なぜ松寺というのか(1)

◆白山と医王山の位置関係

ご承知のように、このお寺の山号は医王山(いおうぜん)といわれていますように、城端・福光・五箇山が、松寺永福寺の故郷です。いまでは医王山はイオックスアローザとしてレジャーの山になっていますが、奈良時代から越中の仏教の聖域でした。

はじめは浄定法師が開かれたわけですが、やく1250年ほど前に泰澄大師というお方が子どものころから超能力をもっておられまして、お山で修行をしているうちに、白山が修行するうえで素晴らしい場所であるということで、さとりを開かれました。

「山上他界」といいまして、山に入ると、日常とは違った世界、壮大な大自然と一対一で向かいあって、身も心も研ぎすまされてくる。仏教は頭で理解するのではなく、身と心が教えと一体になることが、仏教の本来の姿であるわけです。そこでお山で修行することが北陸地方で、盛んになっていたころです。

ところが比叡山の千日回峰行のように、山で修行する場合、かなりの広がりがないといけません。しかし、山では生活できません。奈良の大峰山で修行する人びとは、吉野に住んでいました。丁度それと同じ位置関係にあるのが、白山と医王山だったわけです。

◆泰澄大師と神戸浄定法師

泰澄大師がひとりで修行しておられたところに、臥行者(ふせのぎょうじゃ)という方が弟子入りをされまして、大師の身のお世話をしていたのですが、大師はこの医王山に道場の建立を発願されまして、日本海を通る舟から寄進をしてもらうよう、臥行者に命じられた。ところが、ある舟の船頭がなかなかの人物で「この積み荷は朝廷に差し上げる大切なもの、そもそも坊主たるもの欲を離れたものでないか」と逆に叱られた。それでも托鉢を差し出したら船頭もさるもの、その鉢を海に投げ捨てたというのです。そうしたらその鉢が海から飛びあがってきて、積み荷の米俵から材木やらも鉢といっしょに空を飛んでいったので、船頭はその後を追っかけていったら、医王山の山頂にたどりついたというのです。そこで泰澄大師の教化にあって、弟子となった船頭が、神戸の浄定法師なのです。このお方が松寺の開基になります。(つづく)

あとがき

◆三八・四度という猛烈な残暑でしたが、水中カメラマンの中村征夫さんが、世界中の海を潜ってサンゴの白化現象の進み度合いから、あと地球の寿命は一五〇年だろうという、背筋の寒くなるような診断を下しておられました。地球の汚染とは無関係の酷暑であると願ってやみません。◆三面の「感謝」の欄にご披露いたしましたが、不況のなかにもかかりませず、厚きお執りもちをいただき、念願の夏の打敷の新調をはじめ、寺宝の「平座御真影」や「御伝鈔」四巻の修復など、ながく後世に受け継がれていくよう、再表装をいたしました。ほんとうに有り難うございました。◆同時多発テロから一周年、テロの撲滅という大義名分を掲げてアメリカを中心とするアフガンへの報復戦争に対して「私はブッシュの敵である」と、作家の辺見庸さんがいいます。「ぼくは戦争取材も何度か経験しています。戦場に転がっている人間の破片も見ました。爆弾の下にいる人間の立場にたたなくてはならないのに、日本政府は爆弾を落す側の論理にはまって、殺す方にくみしてしまっています。有事法案に見られるように、いつでも戦争のできる国にしていく危険な動きがある。敗戦という挫折から日本は何も学んでいないのです」(真宗会館発行「サンガ」より)◆次男大寿に、四月二十九日、二人目の男子が誕生しました。「大地」と命名しました。